

# 自分自身についての理解を深める生活科指導の工夫 — イメージマップを活用した伝え合い交流する活動を通して —

東広島市立河内小学校 萩岡 真澄

## 研究の要約

本研究は、イメージマップを活用した伝え合い交流する活動を通して、自分自身についての理解を深める生活科指導の工夫について考察したものである。文献研究から、自分自身についての理解は、ぼんやり気付き始めている自分自身のさまざまな面に気付き、自分のよさや可能性を自覚し、自己について客観的に理解していく過程で深まっていくものであると捉えた。また、自分自身についての理解を深めるためには、イメージマップに自分の思いや気付きを整理し自覚させ、それを継続して活用しながら伝え合い交流する活動を行い、自分と友達の考えを比較させることが有効であることが分かった。そこで、学習展開の中に個と集団の学習を効果的に配置し、それらをつなぐ働きかけとして、言葉かけを工夫したり、シールを用いた振り返りをさせたりした。このイメージマップを活用した伝え合い交流する活動により、自分自身についての理解を深めることができた。

**キーワード：イメージマップ 伝え合い交流する活動**

## I 主題設定の理由

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年）の生活科の改善の具体的事項に、「身の回りの人とかかわりや自分自身のことについて考えるために、活動や体験したことを振り返り、自分なりに整理したり、そこでの気付きを他の人たちと伝え合ったりする学習活動を充実する。」と示されている。また、小学校学習指導要領解説生活編（平成20年、以下「解説」とする。）には、働きかける対象についての気付きとともに、自分自身に気付くことができるようにすることで、児童が自分自身をよりよく理解し、自分のよさや可能性についての気付きを深めると述べられている。

これまでの稿者の授業では、具体的な活動や体験を通して児童が対象への気付きを得ることはおおむねできている。しかし、自分や友達のよさを認め合う交流をさせたり、振り返りの視点を明確にしたり、一人一人の気付きを丁寧に見取り指導に生かしたりすることができていなかったため、自分自身について考えさせることができていなかったという課題がある。一方、当センター教員長期研修の先行研究では、振り返りの場を充実させることで、「対象への気付き」を「自分自身への気付き」へと高めることができている。しかし、振り返りや話合いに時間がかかり、生活科で大切にされなければならない具体

的な活動や体験のための時間を十分に確保することができなかったという課題を挙げている。

そこで、第2学年「みんなでいっしょに！おもちゃランド」の単元において、意図的・計画的に伝え合い交流する活動を配置する。その活動の中で、イメージマップを活用し、気付いたことを振り返り捉え直したり、他者と認め合ったりすることができるようにする。その際、事前に想定した気付きを基に、自分自身について考えられるような働きかけの工夫を行う。これらのことにより、児童は自分のよさや可能性に気付き、自分自身についての理解を深めることができると考え、本主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 自分自身についての理解

#### (1) 自分自身への気付き

小学校学習指導要領（平成20年）の生活に、学年の目標（3）自分自身に関することが加えられ、自分のよさや可能性に気付き、自分の成長についての一人一人の認識を深めることが一層重視された。「解説」には、具体的な活動や体験を通して、「児童が対象と自分とのかかわりを深め、対象に気付くことで、そこに映し出される自分自身への気付きが生じる。」<sup>1)</sup>と述べられている。この自分自身への気付きの具体例として、①集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くこと、②自分のよさや得意と

していること、また、興味・関心をもっていることなどに気付くこと、③自分の心身の成長に気付くことの三つが挙げられている。

これらのことから、自分自身への気付きとは、対象と自分とのかかわりを深めることで、集団における自分の存在に気付くことや、自分のよさや心身の成長に気付くことであると捉える。

## (2) 生活科における自分自身についての理解

宮本光雄(1999)は、「『自分自身への気付き』は、自分自身をよく知り、よくわかるための第一歩であり、とりわけ自分のよさや可能性に気づき、それらを生かし、伸ばし、自己実現を図っていくための出発点でもある。」<sup>2)</sup>と述べている。「解説」には、それまで気付かなかった自分のことに目が向くようになることで、児童は自分自身をよりよく理解し、自分のよさや可能性についての気付きを深めると述べられている。

これらのことから、生活科における自分自身についての理解とは、自分自身への気付きを出発点として、自分自身をよく知り、自分のよさや可能性についての気付きを深めていくことであると捉える。

## (3) 自分自身についての理解を深める

前原武子(2002)は、「自己理解とは、一人ひとりの児童・生徒が、能力、適性、興味、性格、価値観などにおいて、自分はどうのような特徴をもつ個性的な人間であるかという自己についての理解を深めるとともに、自己についての客観的な理解を高めていく過程であるといえる。」<sup>3)</sup>と述べている。藤崎眞知代(平成4年)は、低学年児童の発達段階では、「自己はまだ子どもの独自の認識の対象にはなっていない。自分が見ることができるものの背後に何か漠然と独自なものがあることを、ぼんやり気付き始めている。」<sup>4)</sup>と述べている。また、梶田叡一(1996)は、「教育活動を通じて、まず、自分自身のさまざまな面について気づきをもたせたいものである。また、自分自身にかかわる体験を豊富にし、自己理解を深め広げていくための素材を蓄積させていきたいものである。」<sup>5)</sup>と述べている。

これらのことから、自分自身についての理解は、ぼんやり気付き始めている自分自身のさまざまな面に気付き、自分のよさや可能性を自覚し、自己について客観的に理解していく過程で深まっていくものであると捉える。この過程のごく初期段階である低学年において最も大切にしたいことは、自分自身についての理解を深めていくことで、児童が、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、

意欲と自信をもって前向きに生活できるようにすることである。これは、生活科の究極の目標である自立への基礎を養うことにつながっていく。

## 2 自分自身についての理解を深めるために

### (1) イメージマップの活用

#### ア イメージマップとは

黒上晴夫(2012)は、思いついたことや考えを単語や短い文で書き出し、線でつないで図式化するシンキングツールのことを、イメージマップと呼び、それは次のようなことに役立つと述べている。

- |                        |
|------------------------|
| ① アイデアや問題を視覚化するため      |
| ② 考えや情報を整理するため         |
| ③ 考えをすぐにフィードバックするため    |
| ④ 学んだこと同士のつながりを明確にするため |
| ⑤ 意見を友達同士で共有するため       |
| ⑥ 知識を新しくつくりあげるため       |
| ⑦ 考えを評価するため            |

#### シンキングツールの有効性

このことから、イメージマップとは、思いついたことや考えを短い言葉で表し、線でつないで図式化したもので、自分の考えを想起し視覚化して整理したり、友達と考えを共有したりすることに有効であるものと捉える。体験したことを想起しにくく、文章表現の技能が未熟である低学年児童にとって、イメージマップは、自分の思いを短い言葉を用いて簡単に表現することができるものであると考える。

#### イ 生活科におけるイメージマップの活用

無藤隆(2001)は、イメージマップについて、「気づくはずのことや気づいたことがいくつもあるときに、その間の関連を分かり、何となく気づいていたことを自覚化し、さらに今後の活動への発展を見通す上で、有効に働く。」<sup>6)</sup>と述べている。また、三宅正太郎(1995)は、イメージマップの活用を継続して行い、それらを集めて比較させ、気付いたことを自分の言葉で書かせることで、自分を見つめる「もう一人の自分」を経験させ、新たな自己を発見させる機会を与えることができると述べている。

これらのことから、生活科でイメージマップを活用することによって、自分が気付いたことを、振り返り整理することでより明確に自覚し、活動の見通しをもつことができると考える。さらに、イメージマップを継続して活用することで、自分の気付きの比較や友達の考えとの比較をし、新たな自己を発見することができ、自分自身についての理解を深めることができると考える。

## (2) 伝え合い交流する活動

「解説」には、「熱中し没頭したこと、発見や成功した時の喜びなどは表現への意欲となり、それを基盤とした表現する活動は、低学年の時期には欠かせない大切な学習活動である。」<sup>7)</sup>と述べられている。また、日台利夫（1996）は、児童それぞれが異なるものを相互に交換し合うことによって、友達の気付きや考えを知り、それとの比較を通して自分自身をより深く自覚的に捉えるようになる」と述べている。

これらのことから、伝えたい思いや願いが高まるような活動を行い、伝え合い交流する活動を意図的・計画的に配置することで、児童は相互に情報を交換し、自分と友達の考えを比較し、自分自身をより深く自覚的に捉えることができると考える。この伝え合い交流する活動を、身近な人を相手に繰り返す行うことで、人とかかわることの楽しさを実感し、日常生活の中でも進んで交流していくことができるようになる」と考える。

## 3 イメージマップを活用した伝え合い交流する活動の工夫

### (1) 個と集団の学習を効果的に配置した学習展開

「解説」には、学習過程において、個と集団の学習を効果的に配置し、一人一人の思いや願いの実現を目指した学習とともに、グループや学級全体の場での学び合いも重視することと述べられている。加藤明（1994）は、子どもは自分が手に入れた、聞きたいと思う情報なら、自由な時間の中で上手に情報交換をし、自分にとって必要な情報を得るものであると、自由交流の大切さについて述べている。

また、安彦忠彦（1997）は、「子供一人一人の思いや願いが生きた学習活動が展開されるように学習の過程をふりかえりながら進められたり、自己の変容に気付くよう支援することが大切である。」<sup>8)</sup>と述べ、次の3点を挙げている。

- ① 自分なりの目標や見通しを持つ場を設ける。
- ② 友達と話し合ったり活動したりする場を設ける。
- ③ ふりかえりの視点を明確に示す。

安彦（1997）による自己の変容に気付くための支援

これらを基に、図1に示すような学習展開モデルを作成した。活動中に気付いたことは、イメージマップに言葉や絵で表現させ、気付きを整理したり比較したりできるようにする。このイメージマップを単元を通して継続して活用し、活動の深まりも自己の変容も同時に振り返ることができるようにする。

また、そのことから生まれた新たな思いや願いが、次の活動へとつながっていくようにする。

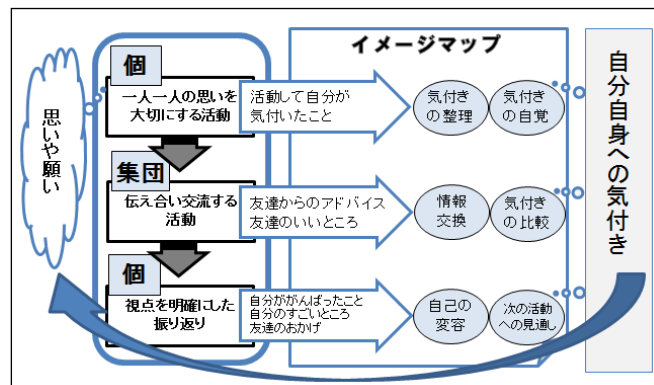


図1 学習展開モデル

### (2) 個と集団をつなぐ働きかけ

朝倉淳（2008）は、生活科において気付きが共有されたり深められたりしていないという課題を挙げ、「『具体的な活動や体験』を通して子どもが気付くであろう『気付き』が想定されていないことが主要な要因であろう。」<sup>9)</sup>と述べている。宮野真知子（2011）は、伝え合い交流する活動において、自分と友達の経験を比較し、次への活動の見通しをもてるよう、教師は、短い言葉の中に含まれる多くの気付きを引き出し、つなぎ合わせ、集団としての考えと個としての考えを結び付けていかなければならないと述べている。

そこで、想定した気付きを基にイメージマップに表現された気付きを見取り、個の活動では気付きを引き出し自覚させる言葉かけ、集団の活動では気付きを比較させつなぎ合わせる言葉かけを工夫する。

また、活動後にシールを用いた振り返りを行う。まず友達へのコメントは、色シールに記述させイメージマップに貼らせる。次にコメントシールと自分がイメージマップに表現した言葉や絵を基に、活動を振り返らせる。その際、表1に示すような安彦（1997）の振り返りの視点を三つに分類したシールを用い、イメージマップに貼らせる。このことにより、活動中の自分自身について考え、短時間で振り返ることができるようにする。

表1 安彦（1997）による振り返りの視点と振り返りシール

振り返りの視点	分類
真剣に取り組んだか ねばり強く取り組んだか 集中できたか	「できた」シール
自分の考えでどんなことを判断したか どんな工夫をしたか どんなことがうまくいったか	「ぼくってすごい」シール
友達とどんなにかかわりができたか	「友だちのおかげ」シール

以上（１）（２）を基に、本研究では、「おもちゃ作り」単元で授業を行う。おもちゃ作りは、活動に没頭することで、自然の不思議さや遊びの楽しさについての気付きが多く生じる。この学習過程の中に、伝え合い交流する活動を意図的・計画的に配置することで、自分や友達よさを認め合い、自分のよさや可能性に気付き、自分自身についての理解を深めることができると考える。そこで、図１の学習展開モデルを基に作成した「おもちゃ作り」単元の学習展開と気付きの想定を図２に示す。第一次では、おもちゃのイメージをしっかりとふくらませたいという児童の思いや願いを基に個の学習を、第二次では、最初におもちゃ作りに没頭した上で、もっと楽しくするために友達にアドバイスをもらいたいという思いや願いを基に、個の学習と自由交流を配置するなど、個と集団の学習を効果的に配置した。本研究で

はこれを基に授業を行う。

### Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

#### １ 研究の仮説

第２学年「おもちゃ作り」単元の学習において、イメージマップを活用した伝え合い交流する活動を行えば、自分自身についての理解を深めることができるだろう。

#### ２ 検証の視点と方法

検証の視点	検証方法
１ 自分自身についての理解が深まったか。 ２ イメージマップを活用した伝え合い交流する活動は、自分自身についての理解を深めるために有効であったか。	行動観察・話し合いの記録・イメージマップ（言葉・絵・振り返りシート・コメントシート）・振り返りシート

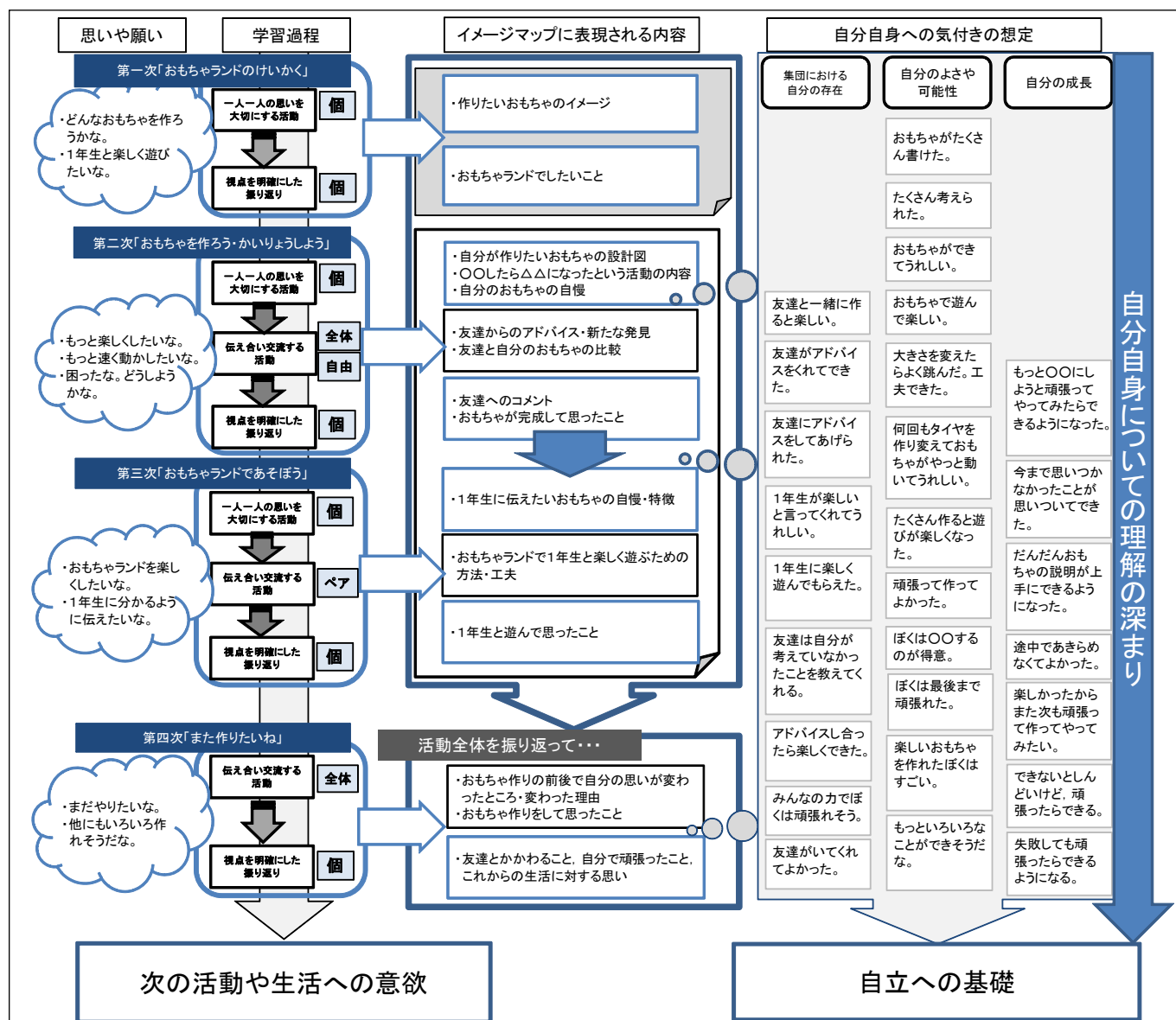


図２ 「おもちゃ作り」単元の学習展開



## IV 研究授業について

### 1 研究授業の内容

- 期 間 平成25年6月21日～平成25年7月12日
- 対 象 所属校第2学年（1学級10人）
- 単元名 みんなでいっしょに！おもちゃランド
- 目 標

身の回りの物を使って、動くおもちゃを友達とかわりながら工夫して作り、発見したことを伝えたり、一緒に遊びを楽しんだりすることを通して、身近な人と進んでかわることの楽しさや、自分の成長に気付くことができる。

### 2 指導計画（全12時間）

次	時	小単元名	学習活動
一	1	「おもちゃランドのけいかく」	・おもちゃのアイデアを出す。
二①	3	「おもちゃを作ろう」	・おもちゃの設計図を作る。 ・おもちゃを作る。
二②	4	「おもちゃをかいりようしよう」	・おもちゃで遊ぶ。 ・おもちゃを改良する。
三	3	「おもちゃランドであそぼう」	・1年生に伝えたいことをまとめる。 ・1年生とおもちゃランドで遊ぶ。
四	1	「また作りたいね」	・単元全体の振り返りをする。

## V 研究授業の分析と考察

### 1 自分自身についての理解の深まり

#### (1) 学級全体の自分自身への気付きの変容

学級全体の自分自身への気付きの変容を明らかにするため、話合いの記録、イメージマップに表現された言葉や絵やシール、振り返りシートへの記述から見取った自分自身への気付きを各次ごとに分類した。その結果が図3である。

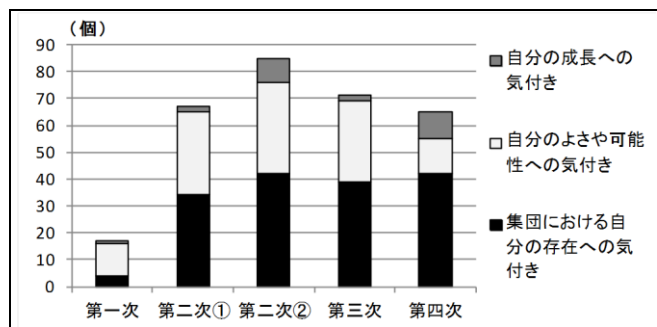


図3 自分自身への気付きが生じた数

図3のグラフより、第二次①から集団における自分の存在への気付きと自分のよさや可能性への気付きが増え、気付きの総数も増えたことが分かる。第二次②では、自分の成長への気付きが増え、気付きの総数も更に増えている。また、第四次でも、自分

の成長への気付きが増えている。

第二次①では、自由交流しながら、友達と一緒に作ったり遊んだりする楽しさを共有することで、気付きの総数が増えたと考える。第二次②では、自分で納得することができるおもちゃが完成し、全体交流で友達と気付きを比較し捉え直したことで、自分が知らなかったさまざまな面に気付き、自分の成長への気付きを自覚できたことで、総数も増えたと考える。また、第三次で1年生を楽しませることができたことや、第四次で活動全体を振り返ったことで、以前の自分と比較し、自己の変容を自覚することができ、自分の成長への気付きが増えたと考える。

気付きの内容を詳しく見てみると、第二次①までは、「できた。」「楽しかった。」などの気付きが多い。第二次②以降、イメージマップを基に各次で交流を繰り返すことで、「友達のアドバイスのおかげでおもちゃが動くようになった。」「このままでいいと思ったけど、考えて改良して楽しくなった。」というような、友達の気付きと関連付けられた気付きや以前の自分と比較した気付きへと変容している。また、自分自身への気付きが蓄積したことにより、第四次には「あきらめずに頑張っていける。」「友達と助けあったら何でもできる。」など、次の活動や生活への意欲につながる気付きへと深まっている。

#### (2) 個の変容

図4のイメージマップの変容を基に、個の変容を分析する。a児は、単元始めは「ゴムで跳ぶうさぎ」の絵の周りに、紙・輪ゴムなど思いつくまま表現していた。第二次の活動中に、友達から材料の工夫についてのアドバイスをもらい、イメージマップに「1」段ボールと書き足し、

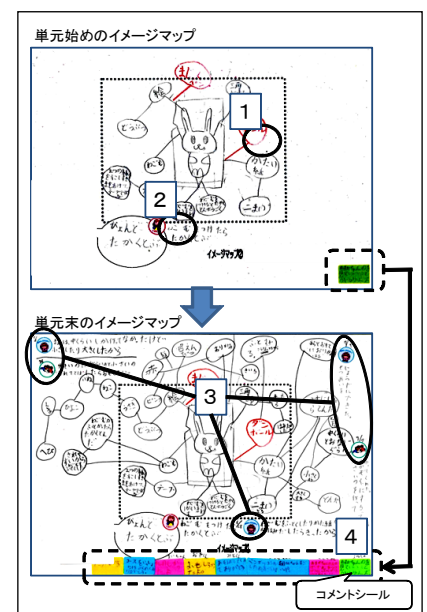


図4 a児のイメージマップ

段ボールに変えて作ったら「高く跳んだ」ことを振り返って、「2」「できたシール」を貼っていた。それをきっかけに、材料を変えながらおもちゃを改良し

始め、試行錯誤しながらたくさんの作品を作っていた。活動中イメージマップに、「ゴムの太さ」「段ボールの大きさ」など気付きもどんどん表現していた。改良後の振り返りでは、**③**のようにたくさんのシールを貼り、その横に「いろいろな大きさのをたくさん作った。」「友達が教えてくれたようにやると面白くなった。」という自分自身への気付きを表現していた。単元末には、**④**のように増えた友達からのコメントシールや、自分が表現した言葉で一杯になったイメージマップを基に活動全体を振り返り、「アドバイスをもらって、面白いおもちゃにすることができた。」「友達と一緒にいると自分も頑張ることができる。」と、友達とのかかわりについて自己の変容を自覚していた。その他の児童も同様にイメージマップの変容が見られ、自分自身についての理解が深まっていた。

以上（１）（２）のことから、イメージマップを継続して活用しながら、伝え合い交流する活動を行うことで、児童が自分自身への気付きを蓄積し、それを基に振り返ることができる。そのことが自己の変容を自覚することや次の活動への意欲につながり、自分自身についての理解を深めることができたといえる。

## ２ イメージマップを活用した伝え合い交流する活動

### （１）個と集団の学習の効果的な配置

#### ア 第二次①【おもちゃ作り（自由）】

第一次でイメージマップを使っておもちゃ作りへのイメージをふくらませ、作りたい思いや願いが高まっていたため、どの児童も意欲的におもちゃ作りをし始めた。b児は段ボールに穴をあけて空気砲を作り、それをたたいて遊ぶことを楽しんでいた。それを見て興味を示した３人の児童が集まり、自由交流し始めた。その様子を以下に示す。

- T 箱をたたいてみて。（b児、箱の上をたたく。c児、穴に顔を近づける。）  
 c うわ〜ほんとじゃ〜。ちょっと来た。  
 （入れ替わり立ち替わり、穴に顔を近づけたり、箱をたたいたりする。）  
 b でもあんまり来ん・・・  
 d 何が来ん？  
 c 空気！空気が少し。  
 d 横をたたいたらいいんじゃない？あ〜来る来る。  
 c ちょっと顔近づけて。これどう？（箱の向きを変えてたたく。）  
 b ん？なんか違う感じがする。  
 c どっちが強い？  
 d 縦が強いよ、縦、縦。



おもちゃ作りの自由交流

b児は、実際の空気の出方を顔に当たる感覚で確

かめ、思ったより穴から空気が出ていないことに気付いた。そして、下線部①のがっかりしたb児の様子をきっかけに、もっと強い空気を出すにはどうすればいいかを交流し始めた。交流後b児は箱をたたく場所によって、出る空気の強さが違うことに気付き、イメージマップに空気の強さの違いをカバとテントウムシの大きさに表現した。b児は休憩時間にも繰り返し遊ぶ中で、的たおしゲームなどの遊びを工夫していった。単元末の振り返りには、「友達は思っていないことを教えてくれる。ぼくは、みんなの力で頑張れそう。」と記述していた。



交流後のb児のイメージマップ

このように、自由交流を通して、児童は今まで気付かなかったことを発見したり、イメージマップに気付いたことを整理し自覚したりすることができた。そのことは、友達のよさに気付いたり、次の活動や生活への意欲を高めたりすることにつながり、自分自身についての理解が深まったと考える。

#### イ 第二次②【おもちゃの改良（全体→自由）】

e児は牛乳パックで舟を作り水に浮かべたが、傾いたり沈んだりしてうまくいかない様子だった。そこで、困っていることを出し合う全体交流の場を設定した。e児は、友達から「うちわであおぐ。」「ゴムを使う。」というアドバイスをもらい、何とかうまく浮かべて動かしたいという願いをもった。そこで全体交流後、大きなたらいを二つ並べて準備しておく、舟を作ったf児と自由交流をし始めた。その様子を以下に示す。

- T これは、どうやるん？  
 f （カップに水を入れながら）ここに半分くらい入れる。そしたらストローから水が少しずつ出て進む。見て、ちょっとずつ進んだらわ〜。（e児はf児のおもちゃの動きをじっと見ている。）  
 f eの舟は、いっぱい付いとる飾りをまず取ってやったらいい。  
 e ひっくり返るんよ。まっすぐしたい。  
 f こっちが重いけんよ。  
 e 浮かぶのは浮かぶんだけど、ここからどうしたらいいか。  
 f 重さ？重さだと思うよ。

おもちゃの改良の自由交流

下線部②が、e児の願いを共有し、一緒に考えるきっかけとなった。そこから、f児の作品と自分の作品を比較することによって、重さを調節することや、舟

底に水を入れるとバランスがとれて浮かぶという新たな見方に気付いていった。

さらに繰返し試す途中、偶然あいた穴から水が出ると舟が動くことにも気付き、大喜びしていた。活動後、イメージマップにシールを用いて振り返った内容を以下に示す。

【e 児の振り返り：友達のおかげシール】

f が教えてくれたから、浮かべられるかも。

【f 児へのコメントシール】

f が飾りを取ったらいよと言ってくれたおかげでできたよ。

【f 児からのコメントシール】

もう少しで浮きそうだよ。



#### e 児のシールによる振り返り

e 児は日記にも「最初は浮かばなかったけど、水をちょっと多めに中に入れたらできました。舟が浮かぶように頑張りました。」と書いていた。シールを使って交流しながら活動を振り返ることで、友達のおかげでできるようになった自分や頑張った自分を自覚していることが分かる。その後 e 児は、「もっとスピードを出して動かしたい。」とさらに工夫しながら意欲的に活動した。

このように、全体交流で友達の気付きと比較し、次の活動への見通しを明確にしたり、自由交流で友達の作品と比較し、新たな見方に気付いたりすることは、頑張った自分や、友達のおかげでできた自分を自覚することにつながり、自分自身についての理解が深まったと考える。

#### ウ 第三次【おもちゃランド（1年生とのペア）】

第三次では、1年生とペアになり、自分のおもちゃ作りの工夫について伝えながら一緒に遊んだ。g 児は作りたいものがなかなか決まらず、あれこれ作っていた。ようやくできた舟も、動きには納得できていない様子だった。おもちゃランド当日は、何とか1年生に喜んでもらえるように、舟に水を入れたり、あおいで進ませたり、水をかきまわして流れにのせたりといろいろな工夫をしていた。おもちゃランド当日と単元末の g 児の振り返りを以下に示す。

【第三次：おもちゃランド当日の振り返り】

1年生が楽しいと言ってくれたのでうれしかったです。④今度はみんなに笑顔になって欲しいです。だったら一生懸命頑張ります。ぼくはすごいんだと思うからです。

【第四次：単元末の振り返り】

ぼくはおもちゃを作ってよかったです。次はみんなよりすごいを作ろうと思います。④ぼくは何でもできる。頑張る。

#### g 児の振り返り

g 児は、1年生と交流し、楽しんでいる様子を感じ取ったり、感想をもらったりすることで、下線部

③のように自分の頑張りが人を喜ばせたということに気付いている。また、第四次の単元全体の振り返りでイメージマップに蓄積されたシールの数を見て、下線部④のように自分はすごい力を持っているという自分のよさや可能性に気付いている。

このように、相手意識、目的意識をもって交流することは、人とのかかわることの楽しさや、新たな自己の発見につながり、自分自身についての理解が深まったと考える。

#### エ 第四次【単元末の振り返り（全体）】

h 児はセロテープの芯やトイレットペーパーの芯を使って「揺れる木馬」を丁寧に作っていた。自由交流で友達から1年生と一緒に遊べるようにするためのアドバイスをもらい、タイヤを付けて動くように何度も改良を繰り返した。アドバイスを基に、作りたいおもちゃを絵で表して明確にイメージしながら作っていった。h 児は「上手にできた。」と、おもちゃの完成を喜んだが、1年生が楽しんでくれるか心配そうだった。

おもちゃランドで遊んだ後、1年生が「楽しかった。」と感想を言っているのを聞いて、h 児は「何回も頑張ってうまくできてうれしかった。」と振り返り、第四次の単元全体を振り返る全体交流では以下のような発言をした。

「私は、木馬がゆらゆらするのが、ひこずるだけになってしまって、キャップをタイヤにしたけど、またひこずるだけになって、次はキャップを回るようにしたけど、タイヤが床までたわなくて、紙でタイヤを作って、ずっとやるのが大変だった。」

#### 全体交流での h 児の発言

その後の単元全体の振り返りでは、「何回も失敗したけど、頑張ってみてできたからうれしかった。」「友達は、自分が思っていないことを教えてくれるから楽しくできる。」と表現し、何度も試行錯誤し頑張った自分や友達と一緒にいることのよさに気付いていた。

このように、単元末に全体交流をすることは、大変だったけど頑張ることができるようになったという自分の成長への気付きを自覚することや、これからも友達と一緒に頑張っていこうという生活への意欲へとつながり、自分自身についての理解が深まったと考える。

#### (2) 個と集団をつなぐ働きかけ

個と集団をつなぐ働きかけによって、自分自身についての理解の深まりが大きく変容した i 児について考察する。i 児はまとまった文章表現をすること



や友達とかかわること、自分自身に目を向けて考えることが苦手な児童である。

次	【i 児の活動の様子】 ◆気付きを引き出し自覚させる言葉かけ ◇気付きを比較させつなぎ合わせる言葉かけ ★シールによる振り返りから引き出された自分自身への気付き ●見取り
一次	【イメージマップにいろいろな種類のおもちゃについて表現した。】 ◆一つ一つのおもちゃについての思いを尋ねた。 ★いっぱい書けた。人と違うものを選んで頑張って作りたい。 ●教師との対話で、活動への見通しがはっきりした。イメージマップに短い言葉で自分の思いを表現することには抵抗がない様子。
二次 ①	【ぶんぶんごまを 10 回改良し、うまくいったことを喜んだ。】 ◇教師は見守りながら、友達と一緒にやってみよう促した。 ★友達からシールを 2 枚もらった。 ★友達のおかげと思ったことがいっぱいあった。 ●友達とアドバイスをやりとりすることで、友達とかかわる楽しさに気付き始めた。
二次 ②	【舟の中に水を入れると進むという動かし方のコツを発見した。】 ◇たらいを二つ準備し、動かなくて困っている児童と一緒に活動するよう促した。 ★舟が動く方法を上手に説明することができた。 ★e くん、もう少しで浮きそうだよ。 ●試行錯誤を重ねて改良できたことで、友達と一緒に工夫する面白さに気付いた。また、おもちゃの特徴を上手に説明できた自分に気付いた。
三次	【1 年生の反応を見ながら、おもちゃの説明をした。】 ◆思いを表現できるよう、新しいイメージマップに振り返りをするよう促した。 ★しんどいけど友達が手伝ってくれて助かった。 ★1 年生が遊び方を分かってくれたので、ぼくの説明はすごい。 ●振り返ったことを四つに整理してイメージマップに表現した。1 年生に上手に説明できたことで、自分のよさや頑張りに気付いた。
四次	【全体交流で i のアドバイスによってうまくできたという発言を聞き、嬉しそうにしていた。】 ◆自分自身を振り返って考えたことが表現しやすいように、新しいイメージマップに活動全体を整理するよう促した。 ★シールを 11 枚もらって、7 枚あげた。 ●こまの改良を 12 回行ったことを表現したり、特に頑張ったところに王冠マークを書いたりするなど自分の頑張りに気付いていた。また、右図のように振り返りシールの数をランキングで表し、「ぼくってすごい！」と思ったことが一番多かったことを表現していた。

i 児の変容

このように、i 児は教師の言葉かけにより、友達とかかわる楽しさに気付き、集団の中の自分の存在に気付くことができた。また、シールを用いた振り返りにより、自分に目を向けて短時間で振り返ることができ、頑張っておもちゃを作った自分のよさに気付いた。そのことにより、i 児は以前より友達と進んでかかわることができるようになってきた。

以上（１）（２）のことから、個と集団の学習を効果的に配置し、それらをつなぎ言葉かけの工夫をしたり、シールでの振り返りをさせたりすることは、自分のさまざまな面に気付き、自分のよさや可能性を自覚することにつながり、自分自身についての理解を深めることに有効であった。そのことは、次の

活動や生活への意欲につながっていくものになっているといえる。

## Ⅵ 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

本研究を通して、イメージマップを活用した伝え合い交流する活動を取り入れる際、次のような工夫をすることが、自分自身についての理解を深めることに有効であることが分かった。

- 学習展開モデルを基に、学習過程の中に、児童の思いや願いに沿った個と集団の活動を効果的に配置すること。
- 学習過程に沿って予想される自分自身への気付きを想定し、それらを引き出すために、イメージマップを継続的に活用しながら、個と集団をつなぐ言葉かけを工夫したり、視点を明らかにし、シールを用いた振り返りをさせたりすること。

### 2 今後の課題

自分自身についての理解を深めるために、次のことを継続して研究していく。

- 自分の思いや活動中の気付きを、関連付けながらイメージマップに整理するための手立てを工夫すること。
- 単元の内容や児童の発達段階に応じて、個と集団の学習の効果的な配置や個と集団をつなぎ働きかけの工夫を行うこと。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版 p. 11
- 2) 宮本光雄（1999）：『生活科・総合的学習重要用語 300 の基礎知識』明治図書 p. 246
- 3) 前原武子（2002）：『生徒支援の教育心理学』北大路書房 p. 175
- 4) 藤崎真知代（平成4年）：『生活科授業の考え方・進め方—その基礎と技法』ぎょうせい p. 42
- 5) 梶田叡一（1996）：『＜自己＞を育てる』金子書房 p. 33
- 6) 無藤隆（2001）：『せいかつか&そうごう第8号』日本生活科・総合的学習教育学会 p. 12
- 7) 文部科学省（平成20年）：前掲書 p. 17
- 8) 安彦忠彦（1997）：『自己評価能力を育てる授業』明治図書 p. 14
- 9) 朝倉淳（2008）：『子どもの気付きを拡大・深化させる生活科の授業原理』風間書房 p. 13